

ケアゴールに基づく認知症ケア技法の比較評価の検討

鈴木 夏也^{†1} 菊池 拓也^{†2} 石川 翔吾^{†2} 竹林 洋一^{†2}

概要: ケアゴールを比較する映像分析ツールを用いて、環境に依らない認知症ケア全体に有効な思考プロセスがあることを表現し比較評価する手法の検討を行った。認知症の人に対するケアで、ケアが円滑に進む事例と進まない事例がある。筆者らは現場での実体験により、円滑にケアを進める現場では共通した理念があることを経験的に得た。ケアゴールでケア提供者の思考を表現することで、理念に基づいてどのようなケアを行っているかを比較評価出来るという知見が得られた。

Comparative Study on Dementia Care Methods Based on Care Goal

Natsuya Suzuki^{†1} Takuya Kikuchi^{†2} Shogo Ishikawa^{†2} Yoichi Takebayashi^{†2}

Abstract: we discuss an approach to comparative evaluation by expressing there is a valid thought process to the entire dementia care that does not depend on the environment using video analysis tools to compare care goal. In care for people with dementia, there is a case that does not proceed and the case that care progresses smoothly. In the field of doing care smoothly, I obtained empirically that there is a common concept by authors hands-on experience in the field. We obtained knowledge that it is possible to do comparative evaluation about what kind of care do there provide based on common concept by expressing care giver's thought process using care goal.

1. はじめに

認知症とは一旦正常に発達した認知機能が低下し、日常生活に支障をきたすようになった状態のことである。認知症の人に対して行うケアが、認知機能の低下した認知症の人を混乱させ不快な状態にさせる原因となっていることがある。恐怖や混乱といった感情を必死に伝えようとした結果として暴力を振るったり奇声を上げたりといった行動心理症状(BPSD: Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia)が出ることもあり、多くの介護現場が疲弊している[1]。一方で、コミュニケーションの取り方を工夫することでそれらの症状が現れないということが経験的に得られてきている。しかし、認知症ケアにおいて実際に何が有効なのかという評価はほとんどなされていない。

このような背景から、種々のケア現場を対象に認知症ケア技法の比較評価について検討する。

2. ケアを円滑に行う介護・看護現場

ケアを円滑に行う現場と多くのそうでない現場では具体的にどのような違いがあるのか、実際に現場へ赴き経験してきたことを元に相違が見られた点を中心に述べる。一般的な現場では以下のような特徴がある。

・怪我をさせない。暴力や興奮がみられる等、場合によっては安全のために拘束をする。

・「入浴して体を綺麗にする」、「口腔ケアを行う」といった目的に基づいたケアが行われており、手早く行う。

・拒否的な反応があった場合でもケアを遂行する。

・入浴や歯磨き等のケアは「綺麗にすること」が目的であり、プロトコルに則って手早く行うことが求められている。

人間関係を形成しコミュニケーションを重視しているというよりは、業務としてのプロトコルを重視していることが分かった。

一方ケアを円滑に行う現場には認知症ケア技法「ユマニチュード」を導入した東京医療センターと介護福祉施設おたがいさんがある[1,2]。これらの現場ではプロトコルよりも人間関係を築きコミュニケーションを取ることを重視している。

東京医療センターに導入されたユマニチュードはフランス発祥の認知症ケア技法であり、「見ること」「触れること」「話すこと」「立つこと」の4つの基本の柱に基づくテクニックを包括的に用いたケアを行う[1,3]。ユマニチュードの特徴を以下に示す。

- ・常に回復を目指したケアを設定する。
- ・日常的な入浴や歯みがき等もリハビリの一つと考える。
- ・強制的なケアは行わない。

ユマニチュードを用いたケアを提供した結果、それまで興奮や暴力等の症状により円滑にコミュニケーションを取ることの出来なかった認知症の人とコミュニケーションを取ることの出来るようになった事例があり、認知症ケアに効果的な技法であると近年評価されている[1]。

介護福祉施設「おたがいさん」には前述したユマニチュードに通ずる点がある。おたがいさんの特徴を以下に示す。

- ・介護されるお年寄りを作らない
- ・個人の出来ることをどんどん支援する
- ・個人のやりたくないことは無理にやらせない

†1 静岡大学情報学部
Faculty of Informatics, Shizuoka University
†2 静岡大学大学院情報学研究所
Graduate School of Informatics, Shizuoka University

ユマニチュードとおたがいさんの特徴において、環境は異なるが認知症の人の機能維持・回復を目指すこと、生活の場へ戻れるように支援をするという点で理念が共通していることを経験的に得た。また、認知症の症状は多岐に渡り、同じ手続きを踏んだケアを行っても同様の結果が得られない場合がある。そのため個人の背景や性格に関する知識を深めた上で個別に設定したケアを行っていることも分かった。

そこで本稿ではユマニチュードを導入した東京医療センターとおたがいさんを取り上げ、ケアの中に共通した理念があることを表現し比較することとした。

3. ケアゴールによるケア提供者の思考の表現

3.1 ケアゴールを用いたケア提供者の思考の表現

共通した理念に基づくケアを比較するためには、ケア提供者がどのような思考のもとにケアを行ったかについて表現することが必要である。その表現手法として今回はゴールを用いることとした。理念をゴールとして考えた時、そこから設定されるケアの具体的な目標をサブゴールとして表現する。図1にゴールの記述例を示す。

またケアの一連の流れの中で、ケア提供者と認知症の人の両者がどのような行動を取り、関わったかをワークフローを用いて動作単位で記述することとした。図2にワークフローの記述例を示す。

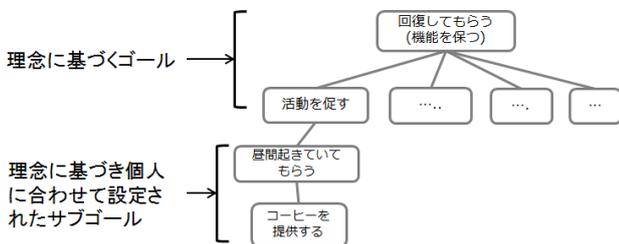


図1 ゴールの記述例

Figure 1 The example of description about Goal Net

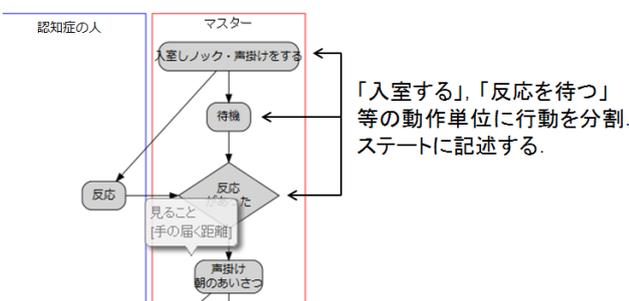


図2 ワークフローの記述例

Figure 2 The example of description about Workflow

3.2 ケアゴールに基づく認知症ケア技法の比較分析

ケアゴールの比較を行うため、比較分析ツールを設計した。設計し実装したツールのインタフェースを図3に示す。

ケアの様子を撮影した事例映像を再生すると、映像の進行に合わせて図中央のワークフローの該当するノードに着色し、点灯状態をあらわす。

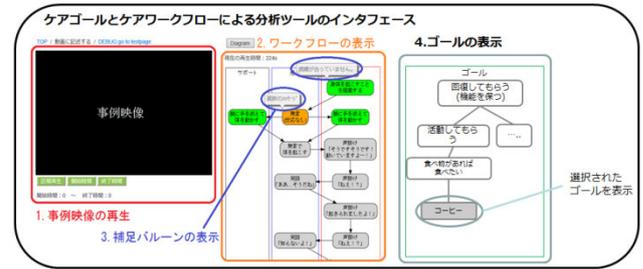


図3 実装したワークフロー分析ツールのインタフェース

Figure 3 The interface of workflow analysis tool

4. ケアゴールに基づく介護・看護現場の事例分析

4.1 分析の手続き

二節で挙げた二か所の現場で、ケアを行う様子をビデオカメラで撮影した。撮影後、ゴールの記述を行うために事後インタビューを実施した。事後インタビューでは利用者の性格や特徴と、ケアの目的に対してどのようにゴールを設定し目的を達成したかについて質問した。撮影した事例映像に対して介護未経験の学生がゴールとワークフローの記述を行い、共通点を比較し分析を行うこととする。

今回の分析に利用した介護施設「おたがいさん」での事例と東京医療センターでの「ユマニチュード」の事例の詳細を表1に、事後インタビューで得られた情報について表2に示す。

表1 事例の詳細

Table 1 Detail about case

事例	ケア提供者	ケア内容
介護施設「おたがいさん」	おたがいさん ケアスタッフ	コーヒーを提案する
東京医療センター「ユマニチュード」	ユマニチュード インストラクターの看護師	入浴を提案する

表2 事後インタビューで得られた情報

Table 2 Detail about ex-post interview

事例	内容
介護施設「おたがいさん」	日中は横になって過ごすことが多く、夜眠るためにも昼間は起きて活動してもらいたい 食べることへの楽しみが大きい。
東京医療センター「ユマニチュード」	直接お風呂に入ろうと誘っても承諾してくれず少ない。 ただし、何か別のケアの流れで誘導すると入ってくれることがある。

4.2 分析結果

ワークフローとゴールを記述した結果を図 4, 図 5 に示す。この結果から環境が異なっても、共通して理念に基づいて設計したサブゴールを利用したケアが行われていることが分かる。環境やワークフローの相違があっても、良いケアを提供する現場間では理念に基づいたゴールの設計がなされているという共通点が見られることが分かった。

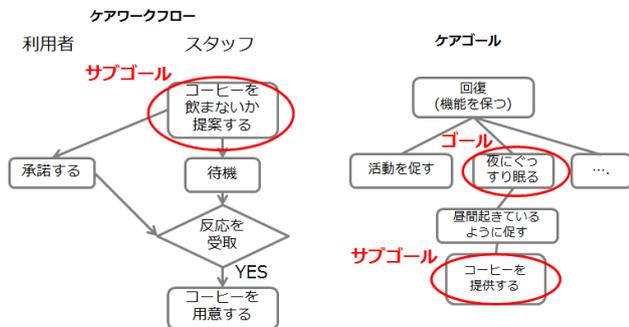


図 4 おたがいさん事例の記述結果

Figure 4 The describe result of Otagai-san

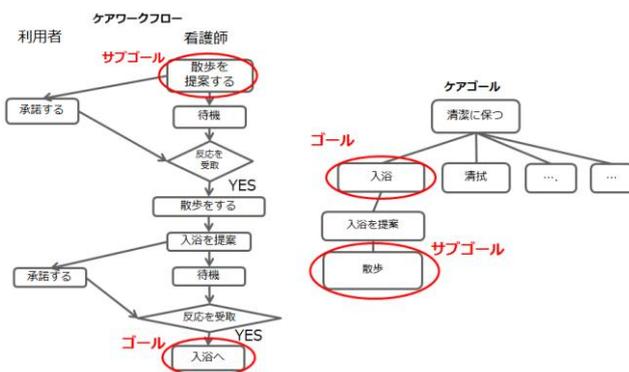


図 5 ユマニチュード事例の記述結果

Figure 5 The describe result of Humanitude case

4.3 考察

環境の異なる二か所の現場の事例の分析から、理念に基づいて設計したサブゴールを用いたケアを行うという思考プロセスに共通点があり、何が起きているか評価するための表現をすることが出来た。

「思想に基づいたケア」や「臨機応変で柔軟なケア」等の良いケアの本質の一つは、ゴールとサブゴールの設計にあり、今後ケアゴールのより詳細な設計が必要である。厳密にはワークフローにおける各ステートが移行する際にもゴールは新たに再設計されていることが考えられ、今回はケア全体のゴールを表現したこととなった。また今回は事例の記述を介護未経験の学生が行ったが、現場でのケア提供者による記述等、現場での知識を表現するための仕組みを今後検討していく必要がある。

今回はゴールとワークフローを用いた分析を行ったが、今後より多くの事例を分析するにあたって、現状では表現

出来ない項目について新たな観点の設定が必要になることも考えられる。また、今後多くの事例を扱って比較分析を行っていくことを想定し、ゴールやワークフローに落とし込む抽象度の表現が課題である。ツールの方向性としては今後知識の伝承や学習ツールへ繋がっていくことも考えられる。

5. おわりに

ケアゴールに基づくケア提供者の思考の表現によって、理念に基づいたケアというものを比較評価することが出来るという知見を得た。今後は考察を通して示された課題点を中心にツールの改良を行っていくとともに、ケアゴールとケアワークフローによる比較分析手法の検討を引き続き行っていく。

参考文献

- 1) 伊東 美緒, 本田 美和子, ユマニチュードのケアメソッド, 看護管理 2013, volume 23, No. 11, pp. 914-921 (2013).
- 2) 加藤忠相, 「地域で人を支える今の形」これからの未来を支えるために知っておく事, 小規模多機能フォーラム(2014)
- 3) 菊池 拓也, 石川 翔吾, 本田 美和子, 盛 真知子, 尾藤 誠司, ジネスト イブ, 上野 秀樹, 竹林 洋一, 人の尊厳を基軸にした「ユマニチュード」のコミュニケーション技法の分析と評価, AI学会全国大会 2014, 2H5-NFC-04c-3, (2014)